国立大学法人　お茶の水女子大学
グローバルリーダーシップ研究所

お茶の水女子大学論

ロールモデル講演集

令和８年度



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

リーダーシップ養成の実践のために

「お茶の水女子大学論」は、キャリアデザインプログラムの基幹科目の 1 つで、主に 1 年生を対象としています。本年度は対面形式で開催し、学部 1〜4 年生を合わせて約 170 名の学生が受講しました。

この授業は、お茶の水女子大学の特色を知り、自らの将来をイメージしながら学生が在学期間を有意義に過ごすための導入的講座で 5 つの要素(※1) から成り立っています。

本講座では、学部生がお茶の水女子大学の歴史と現在を学ぶことを通して、本学の教育カリキュラムを自律的に選択し、授業を有効に活用し、社会の様々な場面でリーダーシップを発揮する人間として成長することを目指しています。

本冊子は、その一環として行われた、卒業生によるロールモデル講演の内容をまとめたものです。

本年度は、特別講演（7/1）池上英子氏、第 1 回（5/27）横窪安奈氏、第 2 回（6/3）角田とよ子氏、第 3 回（6/10）神原茉季氏、第 4 回（7/8）松田有希氏、第 5 回（7/15）黒木春子氏にご登壇いただきました。講師からは、学生時代の過ごし方を含めたご自身のキャリアパスや、現在の仕事内容などをご紹介いただき、さらに職場での体験を通じて得たこと、ご自身のワーク・ライフ・バランスなどについてもお話しいただきました。ご登壇いただいた皆様にはあらためて感謝申し上げます。

なお、本冊子に掲載した写真および画像は、各講演者から許諾を得て掲載しています。

グローバルリーダーシップ研究所

（※1）

1. 学長による講演
2. 本学の歴史、本学の学生の特徴、学内インターンシップ制度を知る
3. 本学卒業生のロールモデルから学ぶ
4. 企業、起業等について学ぶ
5. 特別講演

目　次

リーダーシップ養成の実践のために.....2

見えないものを見る仕事
――研究・好奇心・多文化のなかで自己を広げる.....4
池上　英子
ニュー・スクール大学大学院社会学部　Walter A. Eberstadt 記念講座名誉教授
（文教育学部国文学科 卒）

道草と遠回りで育てるスローキャリアのお話
――人生とキャリアを長く楽しく続けるための私の生存戦略.....8
横窪　安奈
東京大学大学院情報学環　准教授（大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程 単位取得退学）

人との縁が人生を運び、学びが未来につながる
――人生を振り返って、今伝えたいこと.....12
角田　とよ子
株式会社 wiwiw キャリアと介護の両立相談室長（家政学部家庭経営学科 卒）

私の漂流キャリア
――学生時代、社会人生活を振り返って.....14
神原　茉季
日本銀行 国際局国際収支課（生活科学部人間生活学科 卒）

2050 年カーボンニュートラル実現を目指して
――シンクタンクの役割と学生時代の経験から学んだこと.....16
松田　有希
株式会社テクノバ　調査部　第 2G　チーフリサーチャー（理学部化学科 卒）

エンターテイメント産業と私のキャリア――母校で振り返る、私の旅路.....18
黒木　春子
株式会社ソニー・ミュージックソリューションズ　経営管理本部　海外業務管理部　次長
（文教育学部哲学科 卒）

※登壇者のご所属は講演当時のものです。

お茶の水女子大学論　ロールモデル講演 特別講演（2026.7.1）

見えないものを見る仕事
――研究・好奇心・多文化のなかで自己を広げる

池上　英子　（ニュー・スクール大学大学院社会学部
Walter A. Eberstadt 記念講座名誉教授）



特別講演の様子

はじめに

この講演では、「見えないものを見る仕事」というテーマから、研究や好奇心、多文化との出会いが、私たちのものの見方をどのように広げていくのかを考えます。

進路や職業を考えるとき、その根底には、自分は何に問いを抱き、世界とどう向き合うのかという問題があります。社会の表面にはまだ現れていない関係、言葉にならない感覚、制度のなかに埋もれている可能性そうしたものに目を向けることで、見えなかったものが輪郭をもって立ち現れることがあります。自分が当たり前だと思っているものの見方を問い直すことが、新しい世界や可能性に出会う一歩として大切であることをお話します。

問いと偶然が導いた研究の道

私のキャリアには、初めから完成した設計図があったわけではありません。お茶の水女子大学で学んだ当時は、今よりもジェンダーによる制約が強く、女性が希望する職業を選び、将来のキャリアを描くことも容易ではありませんでした。当時、大手マスコミは、「女子も応募可」としてキャリアトラックの採用に門戸を開いていた数少ない分野でした。卒業後、日本経済新聞社に入り、社会の動きに触れながら、自分は

何を考え、何を問い続けたいのかを探していました。

本学の文教育学部国文学科で身につけた、解釈を急がず、テキストや資料に戻って、何が書かれ、何が書かれていないのかを確かめる姿勢は、後の研究にもつながりました。その後アメリカに渡り、ハーバード大学の博士課程に入りました。欧米流の人文科学教育にどっぷり浸かるなかで、日本について自分にとって当然だった文脈を改めて言葉にする機会が増えました。外から見ることで、近すぎて見えなかったものが輪郭を持ちはじめます。異なる知的文化に身を置くことは、自分自身の思考の癖、見えない枠に気づく経験でもありました。

見えないものを捉える

見えにくいものが姿を現す瞬間を、私は海面から跳ね上がるトビウオにたとえています。飛ぶ瞬間は予告されないからこそ、注意深く見続けなければなりません。しかも、見る側も揺れる船の上にいます。研究者も、自らの視点や文化に支えられ、ときには揺さぶられながら対象を見つめているのです。

私が研究してきた近世日本の文化ネットワークにも、制度だけでは見えにくいものがありました。身分制社会であった江戸時代にも、俳諧や狂歌、歌舞伎、出版文化などを通して、人びとが身分を超えて出会い、表現を交わす場がありました。そこには、公式の身分秩序とは異なる横のつながりや、社会制度だけでは捉えきれない表現の回路がありました。それは公式の身分役割とは違う自己が発現する場でもありました。

表現の場と異なる感覚世界

こうした関心は、Second Life という仮想世界へと広がっていきました。一見異なる世界ですが、「人はどのような場を得ることで、自分を表現できるのか」という共通する問いがあります。研究対象を次々に変えてきたように見えても、振り返れば、私は異なる場所で同じ問いを追ってきたのだと思います。

私が仮想世界で出会った自閉症スペクトラムの人びとは、アバターという姿を通して自分たちの場をつくり、交流していました。人の能力の現れ方は本人の特性だけでなく、環境や表現の形式によっても変わります。その一人、ラリーは自閉症スペクトラムの当事者で、自分の見え方や感じ方を、光や線、通路を組み合わせた仮想空間として構築しました。言葉だけでは伝えにくい内面が空間として姿を現し、他者もそのなかに入ることができるのです。

こうした感覚の多様性は仮想世界だけのものではありません。文学作品や、異なる時代の人びとが残した記録からも、世界の感じ方は一つではないと気づかされます。異なる文化や歴史を生きた人びとの世界を想像し、自分とは異なる感覚を持つ他者とどう共に生きるのかを考えることは、グローバルな時代の市民性にもつながります。



研究中の様子



仮想世界 Second Life で開催されたラリーさんの DJ パーティー
（「Kiremimi」（白いドレス）は池上英子先生のアバター）

おわりに　外なる多様性と内なる多様性

　最後に、メビウスの輪を思い浮かべてみましょう。表と裏が別々に見えても、輪をたどればいつのまにかつながっています。他者の感覚世界や異文化、過去の人びとの価値観を追っているうちに、やがて自分自身のものの見方へと戻ってくる。外なる多様性をたどることは、私たち一人ひとりの内なる多様性に出会うことでもあります。

　研究とキャリアも同じです。別々に見えていた経験が、後になって思いがけずつながり、新しい問いを生むことがあります。すぐには理解できない他者や、まだ名前のついていない違和感を切り捨てず、見続け、

問い続けてほしいと思います。自分にも他者にも、そして世界にもまだ見えていない可能性があります。

人びとの言葉と行動を丁寧に追いながら、その可能性が姿を現すまで探究心を灯し続けること。

それが、研究することにも、生きることにも大切なのだと思います。

参考文献・資料

Ikegami, Eiko. *The Taming of the Samurai: Honorific Individualism and the Making of Modern Japan*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1995.

邦訳：池上英子『名誉と順応――サムライ精神の歴史社会学』森本醇訳、NTT 出版、2000 年。

Ikegami, Eiko. *Bonds of Civility: Aesthetic Networks and the Political Origins of Japanese Culture*. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.

日本語版：池上英子『美と礼節の絆――日本における交際文化の政治的起源』NTT 出版、2005 年。

Ikegami, Eiko. "Waiting for the Flying Fish to Leap: Revisiting the Values and Individuality of Tokugawa People as Practiced." In *Values, Identity, and Equality in Eighteenth- and Nineteenth-Century Japan*, edited by Peter Nosco, James E. Ketelaar, and Yasunori Kojima, 27–50. Leiden: Brill, 2015.

邦訳：池上英子「トビウオが跳ねるのを待ちながら――江戸の人々が実践した価値観と個性を再訪する」大野ロベルト訳、ピーター・ノスコ・ジェームス・E・ケテラー・小島康敬編『江戸のなかの日本、日本のなかの江戸――価値観・アイデンティティ・平等の視点から』柏書房、2016 年、43–67 頁。

池上英子『ハイパーワールド――共感しあう自閉症アバターたち』NTT 出版、2017 年。

池上英子『自閉症という知性』NHK 出版、2019 年。

池上英子・田中優子『江戸とアバター――私たちの内なるダイバーシティ』朝日新聞出版、2020 年。

Ikegami, Eiko, and Piet Hut. "Avatars Are for Real: Virtual Communities and Public Spheres." *Journal of Virtual Worlds Research* 1, no. 1 (2008): 1–19.

池上英子 EIKO IKEGAMI（池上英子ホームページ）2026 年 9 月 25 日閲覧。
https://www.eikoikegami.com/

Ikegami, Eiko. *Diverse Intelligences: Eiko Ikegami's Research and Travel Blog*. Accessed September 28, 2026.
https://eikoikegamitravelblog.com/

道草と遠回りで育てる スローキャリアのお話
――人生とキャリアを長く楽しく続けるための私の生存戦略

横窪　安奈　（東京大学大学院情報学環　准教授）

はじめに

東京大学大学院の情報学環に所属し、人とコンピュータを繋げてどのように生活が豊かになるかを探求するヒューマンコンピュータインタラクション（HCI）や文化とテクノロジーの融合・深化を目指す文化コンピューティング、AI や IoT を活用した行動変容の研究をしています。最近は、効率化だけでなく、あえて時間をかけることで深い理解や創造性を生み出す「スローデジタル」に関心があります。華道・茶道・香道、生成 AI によるいけばな創作支援、スマートシティへと対象を広げながら、人の感性を豊かにするテクノロジーのあり方を考えてきました。

この度、「お茶の水女子大学論」という大変光栄な講義にお招きいただき、皆さんの前でお話させていただけることを心より楽しみに参りました。今の私は大学教員として研究・教育活動に従事していますが、私のキャリアは、とてもゆっくりしたスローキャリアです。本日は、そんな私のスローキャリアについて、3 つの転換期を踏まえてご紹介させていただきます。

第一の転換期：他大学からお茶大へ

私は、公立はこだて未来大学で情報デザインを学びました。そこで出会った数多くの素敵な先生方から多くの影響を受け、木村健一先生に誘われて始めた華道は、現在まで続く研究テーマになりました。美馬義亮先生（今でも北海道の若手 IT 人材育成事業の新雪プログラムでご一緒させていただいています）の後押しで、お茶の水女子大学大学院の椎尾一郎研究室へ進学し，学生対象の VR コンテスト「IVRC」、東大制作展、未踏ユース、フィンランドへの短期留学などを経験しました．椎尾先生の仏のようなお人柄と椎尾研究室のメンバーに恵まれ、一生のお友達ができたことは私にとってのかけがえのない財産です。

第二の転換期：会社員から大学教員へ

修士課程修了後、私はキヤノン（株）に入社すると同時に博士課程に進学し、いわゆる「社会人博士」になりました。会社員時代は，共同研究や特許・商品化、海外展示会など大企業の社員で無ければできない経験をさせていただきました．一方で、会社員として研究時間を確保する難しさにも直面し、30 歳を前に「これからどのような人生を送り、何に時間を使いたいのか」を問い直しました．就職活動をしていた頃には、安定や将来の出産（幻の赤ちゃん[1]）との両立を先回りして心配していたのですが、現実の選択を決めるのは、まだ起きていない未来ではなく、その時の自分のやりたいことだと思い返しました。この選択を

するまでには、今までお世話になった方からの助言や本[1] [2][3]から学ぶことが多かったです。

その後、私は「人生で博士号は取得しておきたい！研究したい！」と奮起し、アカデミアに戻ることを決めました。幸いご縁があって、青山学院大学へ転職し，2020 年に博士号を取得しました。ロペズギヨーム先生の元では，未経験のウェアラブルや生体センシングを学び直し、研究の幅を広げることができました．研究は何度も行き詰まりましたが、仕事としての研究と自分のやりたい研究を行き来することが、新しい視点に繋がりました。

第三の転換期：子ども誕生、働き方を再考する

第一子の出産で 1 年、第二子の出産で半年の産休・育休を取得しました。妊娠中の体調不安や転職など、計画通りに進まない出来事を経験し、全てをこなすことより、私が本当に望む働き方[4]は何かを再考しました。第一子出産後に東京大学に転職し、子どもが小さい間は、夕方以降に固定授業を持たず、自分の研究時間を確保し、夫と子育てを楽しめることを大切にしました。越塚登研究室では，新たにデータ連携基盤、IoT、AI、スマートシティを学び、産学官・国際共同研究へ研究領域を広げています。

長く楽しくキャリアを続けるための生存戦略

私は、企業、海外大学、私立大学、国立大学と働く場所を移り、アカデミア一本でキャリアを進めてきた人より研究に集中した期間が短いとネガティブに捉えることもありました。ですが、異なる分野の知識や経験を結びつけ、立場の違う人と協働する力は、今では自分の強みです。

キャリアを続けるために大切なのは、細々としていても長く楽しく続けることだと思っています。好きなことを続け、学び直し、成果を発信し、巡ってきた機会を有り難く引き受けることを大切にしていますどんなタイミングでも選択を迫られると迷いますが、力不足と感じることでも、心躍る方を選んできました。チャンスは制御できなくても、準備と発信を続けることで、ご縁を次の機会に繋げることはできるのではないでしょうか。

その基盤にあるのは礼儀と思いやり[5]です。私のキャリアは多くの方の支えで成り立ち、受けた恩は次の世代へ「恩送り」したいと思っています。

お茶大生の皆さんへ

皆さんには，「自分の好きなことを楽しみながら続けること」「主流ではない選択を怖がらないこと」を伝えたいです。私は博士号取得まで 8 年、助手・助教として 9 年を過ごしましたが、その時間に複数分野の研究、教育、社会実装、海外との繋がりを得ました。停滞に見える時期も、次の挑戦への準備期間になります。他人と比べず、今の選択が自分の人生で何を大切にしているのかを問い続けて欲しいなと思います。また、かつて私がそうだったように、まだ起きていない結婚や出産などの制約のために、今の挑戦を諦めないで欲しいなと思います。人生は計画通りに進まないからこそ、変化に応じて仕事と生活を何度でも柔軟に組み替えて、心豊かなキャリアを歩めることを願っています。

参考文献・資料

[1] シェリル・サンドバーグ『LEAN IN（リーン・イン）：女性、仕事、リーダーへの意欲』村井章子訳、日本経済新聞出版社、2013 年。

[2] リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット『LIFE SHIFT（ライフ・シフト）：100 年時代の人生戦略』池村千秋訳、東洋経済新報社、2016 年。

[3] アシュリー・ウィランズ『TIME SMART（タイム・スマート）――お金と時間の科学』柴田裕之訳、東洋経済新報社、2021 年。

[4] ジェニファー・ペトリリエリ『デュアルキャリア・カップル――仕事と人生の 3 つの転換期を対話で乗り越える』高山真由美訳、英治出版、2022 年。

[5] クリスティーン・ポラス『Think CIVILITY：「礼儀正しさ」こそ最強の生存戦略である』夏目大訳、東洋経済新報社、2019 年。



横窪 安奈先生 ご講演



お茶の水女子大学論　ロールモデル講演 2（2026.6.3）

人との縁が人生を運び、学びが未来につながる
――人生を振り返って、今伝えたいこと

角田　とよ子　（株式会社 wiwiw　キャリアと介護の両立相談室長）

私の登壇日であった6 月 3 日は台風の影響でオンライン授業となりました。皆さんに直接お話できなかったのは残念でしたが、録画配信もしていただき、これまでの歩みを多くの方に聞いていただけたことを、ありがたく思っています。

ご縁に導かれた人生の歩み

人生 100 年時代といわれますが、来年古希を迎える私が、今も企業で働いているとは想像もしていませんでした。

最初の転機は、高校 3 年生。進路に迷っていた私は、高校の先輩からお茶大の家政学部家庭経営学科の話を聞き、家族や生活について学ぶことに魅力を感じて、進学を決めました。大学では家族関係学のゼミに所属し、「家庭の健全度と病理度の測定」をテーマに卒論を書きました。

卒業後は埼玉県立高校の家庭科教員となり、生徒が笑顔になる授業を目指しました。しかし、転勤族の夫と結婚して退職。結婚披露宴で恩師に声をかけていただき、お茶大で教務補佐員を務めました。出産後は専業主婦として、PTA 活動や友人との交流、趣味や習い事を楽しみましたが、「何か違う」と感じていました。

次男が小学生になった 35 歳のとき、家庭経営学科の同窓会（花経会）の設立準備会に参加しました。役員を引き受けたことで、先輩や後輩とのご縁に恵まれ、視野が広がりました。

40 歳の頃、大豆アレルギーと化学物質過敏症を発症。徹底した除去食と有害物質を避ける生活を指示され、初めは落ち込みましたが、前向きに取り組んだ結果、症状は劇的に改善しました。

介護相談との出会い

現在の住まいに移ってから、地域の女性セミナーに誘われて入会。仲間と共に会を NPO 法人化し、東北の被災者支援やジェンダー平等に取り組みました。

45 歳のときに、仲間の依頼を受け、他大学の教務補佐員として働き始めました。その後、私立の男子中高の家庭科教員の話が実現しなかったことを同窓会（花経会）の先輩に話したところ、「あなたにぴったり」と『介護支え合い電話相談室』の室長職を紹介されました。先輩に感謝し、思い切って引き受けました。

以来、相談業務、高齢者ご本人や施設・病院で働く方々、大学院の公開講座、夫と私の両親の介護を通して、高齢者介護を学び続けています。相談室には、介護離職後の心身の不調や経済的不安を訴える相談が多く寄せられ、「介護で仕事を辞めないで」と働く人に伝えたいと強く思うようになりました。

経験を社会に還元する

59 歳のとき、株式会社 wiwiw の社長から「資格より寄り添ってきた経験が大事」と言われ、入社しました。長年の願いがかない、仕事と介護の両立支援に携わり、企業・官公庁・自治体でのセミナー講師、相談対応、執筆活動をしています。介護に関する本を 3 冊出版し、大学の恩師の勧めで学会や団体にも入会し、樋口恵子賞実行委員も務めています。

振り返ると、私の人生は、学びを蓄える時期から、それを社会に還元する時期へと移ってきたように思います。大学での学び、教員や大学職員の経験、子育て、地域活動、病気、介護相談。そのすべてが、今の仕事や活動に生きています。一つひとつが土台となり、無駄な経験は一つもありません。

皆さんへのメッセージ

人生には、意味が見えない時間や思い通りにならない出来事もあります。それでも、その時々にできることに向き合っていると、思いがけない形で将来につながっていきます。まさに「人間万事塞翁が馬」。そのときは残念に思えた出来事が、後になって新たなご縁を運んでくれることもあるのです。

私は、「ありきたりのことをできるだけ楽しく喜んで実行する」というマザー・テレサの言葉と、「どうせやるなら姿勢よく笑顔で」を、心がけてきました。

皆さんには、出会いを大切にしてほしいです。人とのご縁が人生を動かします。大学時代には、好きなことや関心のあることを見つけ、長く続けてください。学びや趣味は、時を超えて力となり、人生を豊かにします。焦らず、さまざまな出会いや学びを楽しみながら、あなたらしい道を歩んでください。



角田 とよ子先生 ご講演

お茶の水女子大学論　ロールモデル講演 3（2026.6.10）

私の漂流キャリア ――学生時代、社会人生活を振り返って

神原　茉季　（日本銀行 国際局国際収支課）

はじめに

私は現在、日本銀行で国際収支統計の作成に従事しています。本日は今までのキャリアを振り返り、皆さんと少し近い目線で参考になるお話ができればと思います。

学生時代

中学高校は地元で部活に打ち込み、もっと外の世界を知りたいという思いで上京しお茶大に入学しました。大学では統計分析に興味を持ち、社会調査実習の授業で自ら仮説を立てて研究する楽しさを知りました。卒論では 200 枚超の調査票を集めて大学生の就業意識を研究し、ここで実感した「アンケート用紙 1 枚 1 枚に回答者の時間がかかっている」という感覚は今の統計作成の仕事にも生きています。

就職活動では、企業や業界の違いをよく分からないまま親から何度も聞いた「やっぱり公務員が 1 番だよ！」という言葉に流され、公務員と公的な企業を志望しました。最終的には、ゼミの先輩の進路でもあり、公的統計に携わることができる日銀への入行を決めました。

社会人生活

統計作成は今でこそ自分に向いている仕事だと思いますが、新人時代はその地道さに打ちのめされました。大量の紙の報告書を 1 枚 1 枚めくり、電話で確認し…あまりの電話の多さに驚きましたが、先輩や上司を見習い日々ひたむきに取り組みました。2 年目になると業務の全体像が見渡せるようになり、統計公表時には各種報道に取り上げられることもあって、社会に必要なものを作っているという仕事のやりがいを感じることができました。日々の地道な作業を積み重ねた先に確からしい統計があるのだと腑に落ち、毎月当たり前に公表される数字の裏側で必死に手足を動かすことを、私は何だか面白いと思ったのです。

入行 3 年目からは、苦手意識の強かった英語を使う業務も割り当てられました。思い出深いのは、パリの OECD 本部で開催された統計の国際会議に出席したことです。日本からの参加者は私一人のため不安でいっぱいでしたが、上司から出張の話を頂いた際は「ぜひ行かせていただきます！」と即答しました。出張までの 3 カ月間、近所の英会話教室に通いとにかく英語を話す練習をし、職場では上司に相談しながら発言原稿やスライドを用意したほか、統計に関係する英語を頭に入れました。また、雑談ネタをまとめたノート（挨拶、フライトや料理の感想等）を作成し、パリの地図や地下鉄の路線図も打ち出しておきました。実際の出張ではヒヤッとしたこともありましたが、事前の準備のお陰で（雑談ノートは大活躍！）何とか乗り越えることができました。

この出張を通して、私の拙い英語を誰も笑ったりせずに対等な姿勢で接してくれたことは、仕事で英語を使うことへの自信につながりました。まず話す中身が重要で、事前に考え準備して臨む姿勢が大切なのだと思いました。また、実際に行ったからこそ得られた現地の空気感や会議の所作、各国参加者との交流がありました。「こんなチャンス滅多にない！」と飛び込んだ先で貴重な経験が得られ、一歩踏み出して良かったと心から思いました。

育休復帰を経て

昨年長女を出産し、1年間の育休を取得し4月から職場復帰しました。入園後の体調不良の多さには面食らい、夫と分担しながら何とか乗り切る日々ですが、仕事と家庭がある生活はメリハリがあり（意外にも）自分に合っていたようで、また働ける場所があることに感謝しています。

キャリアを振り返って

初めから「これだ！」という道が見えていなくても、目の前の一つ一つに全力で取り組む中で自分にとって好ましい道が開けてきました。自分なりに精一杯取り組むとその出来栄えに自分らしさが反映され、次の道へつながっていくと思います。自分にはできないと尻込みするようなことでも、少しでもやってみたい気持ちがあれば、飛び込んでみることをおすすめします。必要なら周囲を頼り、一生懸命やってみたら案外できるかもしれません。完璧な出来でなくともやった分だけ学びがあり、次のチャレンジにつながるはずです。

メッセージ

最後に学生の皆さんへ、「社会人もちゃんと楽しいよ！」とお伝えしたいです。「責任を持って仕事をし、成果が認められ、対価を得て好きなことに消費し休みを存分に楽しむ」という、社会人なりの楽しさがあると思います。皆さんの明るい未来を応援しております。本日はありがとうございました。



神原 茉季先生 ご講演

2050 年カーボンニュートラル実現を目指して
――シンクタンクの役割と学生時代の経験から学んだこと

松田　有希　（株式会社テクノバ 調査部 第 2G チーフリサーチャー）

シンクタンクの役割と働き方

シンクタンクは、正解のない社会課題に常に挑戦し、顧客とともに課題解決を目指す専門家集団です。

私が勤務する株式会社テクノバは、中堅シンクタンクとして、2050 年カーボンニュートラル（CN）の実現に向け、顧客が抱える脱炭素経営の課題解決を支援しています。エネルギー・環境分野とモビリティ分野を中心に、調査・分析およびコンサルティングを行っています。同じチームには 30 代から 50 代までのメンバーがおり、それぞれの専門性を活かしながら協力して業務に取り組んでいます。

大手シンクタンクとは異なり、中堅シンクタンクには、専門性を高めながらも幅広いテーマを担当できることや、少人数ならではの機動力と柔軟性があることが特徴です。

業務の中心となるのはレポート作成です。顧客の課題を整理し、文献調査やヒアリング調査などを通じて必要な情報を収集・分析し、提案へとつなげます。期間は 3 か月から 1 年程度で、最終的な報告書は 50～200 ページに及ぶこともあります。また、情報発信のため、シンポジウムを開催することもあります。

シンクタンクの仕事には、企業向け案件と省庁向け案件があります。特に省庁向け案件はすべて公募で実施されるため、事前の情報収集や提案書作成など準備に多くの労力を要しますが、その分、社会的意義の大きなテーマに携わることができ、やりがいを感じています。

シンクタンクに向いている人は、「なぜだろう？」と考えることが好きで、コミュニケーション力がある人です。一人で調査する仕事をイメージされるかもしれませんが、実際にはヒアリング調査やシンポジウム運営など、人と関わる機会が非常に多く、高いコミュニケーション力が求められます。

2050 年カーボンニュートラル実現に向けて

2020 年の日本政府による CN 宣言以降、さまざまな政策や制度が整備され、大企業を中心に温室効果ガス排出量削減への取組が本格化しています。

カーボンニュートラルを実現するためには、省エネや低炭素エネルギーの活用に加え、再生可能エネルギーや水素、CO_2 回収・活用技術などの導入が重要です。こうした GX（グリーントランスフォーメーション）は、単なる環境対策ではなく、新しい技術やビジネスを生み出す成長戦略として位置付けられており、国も大規模な投資を進めています。

企業にはサプライチェーン全体を含めた温室効果ガス排出量の把握や情報開示が求められるようになり、多くの企業で脱炭素化に向けた取組や実証事業が進められています。世界有数の環境推進都市である東京

都では、余剰再エネを利用した水電解による水素製造設備や水素燃料バス、電動船など新しい技術の社会実装も進んでいます。

皆さんも日常生活の中で、こうした取組を目にする機会が増えていると思います。ぜひ見学や体験を通じて、CN/GX について興味を持っていただき、これからの脱炭素社会を支える人材として活躍することを期待しています。

学生時代の経験　～科学史クラブ～

私が学生時代に印象に残っているのは、化学科講演会で立花太郎名誉教授との出会いです。

その中で、「池田菊苗と夏目漱石がロンドンで交流し、物理化学のマクロ的な捉え方が漱石の文学論の整理にも影響を与えた」と伺い、理系と文系という異なる分野が互いに影響を与えていることに驚きました。また漱石の「三四郎」を読んだばかりの私は立花先生と意気投合し、文通を通じた交流が始まりました。「お茶大周辺にはたくさん科学史にまつわる史跡があるのに興味を持つ人が少ない」と嘆く先生の言葉をきっかけに、立花先生や友人たちと一緒に、お茶大周辺に残る科学史に関する史跡や、お茶大ゆかりの卒業生の歴史を調べる活動を始め、最終的に 12 ページの冊子としてまとめました。

今振り返ると、この活動は、現在のシンクタンクの仕事にも通じる経験だったと思います。

また、お茶の水女子大学には、日本初の女性科学者をはじめ、多くの素晴らしい先輩方がおられます。そうした先輩方の挑戦の積み重ねが、現在のお茶大につながっていることを、ぜひ学生の皆さんにも知っていただきたいと思います。学生時代には興味のあることにぜひ積極的にチャレンジし、学科の友人との良い関係を築いてください。



松田 有希先生 ご講演

エンターテイメント産業と私のキャリア
――母校で振り返る、私の旅路

黒木　春子　（株式会社ソニー・ミュージックソリューションズ
経営管理本部 海外業務管理部 次長）

この度は母校の学生の皆さんを前に、私のキャリアを振り返る機会をいただき、ありがとうございました。
“ロールモデル”と呼ばれるには程遠い私にとって、自身の仕事と生活を振り返り人前で話すのは、初めての機会でした。

卒業以来、場所や視点を変えながら私が携わってきたエンターテイメント業界は、学生の皆さんにとっても意外と身近な産業です。一方、私自身が社会人になってからも、在学中に専攻した哲学と仕事の関係を常に問われ続けてきたため、このギャップは面白いテーマになるかもしれないと思いました。おかげで講演内容を考える時間は私にとって大変興味深いものでした。

講演では、まず IP（知的財産）を通して人々に感動や楽しみを届けると同時に、新たな IP を生み出し、循環させる大きな経済圏としてのエンターテイメント産業についてお話ししました。また、デジタル化やグローバル化、さらにはコロナ禍をはじめとする大きな変化を経ながら、業界がどのように変遷し、その中で私自身がどのようなキャリアを歩んできたのかについて振り返りました。

もっとも、私のキャリアは最初から明確な目標を持って築かれたものではありません。4 年生の秋、新聞で偶然見つけた求人がきっかけとなり、それまで思い描いていた進路が大きく変わりました。当時は音楽、出版、映画、放送がそれぞれ独立した産業として存在し、今では巨大なゲームも産業としての認識が始まったばかりでした。「エンターテイメント業界を目指そう」という意識はなく、興味を持った仕事に進んだ結果、その後の時代の変化とともに大きな産業の一員になっていました。今回あらためて自分の歩みを振り返り、それに気づくことができたのも、この講演で得た収穫でした。

講演当日は約 30 年ぶりの母校訪問でした。正門をくぐった瞬間、そして教室で皆さんと向き合った瞬間、まるでタイムトラベルしたかのように学生時代の自分が蘇りました。私も当時は未来への好奇心と同じくらい、不安や疑問を抱えていました。講演で「失敗することは当然」「経験に縛られない今を謳歌してほしい」とお伝えしたのは、その時の自分を思い出したためです。

仕事柄、一つのメッセージが受け手によって無限に解釈されることを日々経験しています。講演後いただいたリアクションペーパーにも豊かな感性と率直な思索があふれ、拝読しながらワクワクしました。業界への興味や理解のみならず、自分が生きる時代をどう捉えるか、変化の激しい社会

とどのように向き合っていくかといった問いに真摯に向き合う姿勢が伝わり、皆さんのみずみずしい感受性に大きな刺激を受けました。

この講演をきっかけに、学生時代の親友である神崎（藤居）啓子さんのことを改めて思い出しています。同じように近郊の公立高校から一浪して哲学科に入学した私たちは、すぐに親しくなりました。彼女はテニスに打ち込み、一年中日焼けして湘南からラケットを抱えて通学していました。私はサークルもやらずにブラブラしている身の上でしたが、2人とも哲学科の勉強も、俗っぽい楽しみも両立するタイプで、話題は尽きませんでした。

4年生を前にした春休みには、沢木耕太郎著『深夜特急』に憧れ、2人で東南アジアを旅しました。バンコクからマレーシアへ鉄道を乗り継ぎ、その後インドネシアを陸路で横断してバリ島を目指しました。特にインドネシアの陸路は困難でしたが、ようやくバリ島へ向かう船に乗り込んだときの解放感を、講演後にふと思い出しました。

こうして就職活動に出遅れた私たちでしたが、彼女は損害保険会社に就職し、学生時代のボーイフレンドと家庭を築き、2人の息子さんをのびのび育てながらキャリアを重ねました。残念ながら3年前に病で急逝されましたが、講演後には、就職した年の初夏の思い出も蘇りました。2人で学生時代のように銀座で待ち合わせをし、それまでは入れなかったお店に入って2人して靴を買った日のことです。この時もバリ島に向かう船上のような、心地よい風を感じたのを覚えています。

同じ不安を抱えながら前へ進む友人の存在は、大きな力になります。友人との語らいの中でこそ解決の糸口が見つかる課題に出会うことも、社会に出る準備の一つだと思います。

後輩の皆さんが学生生活を存分に謳歌され、素晴らしい友人と出会われること、そしてそれぞれの旅路が実り多きものとなることを心よりお祈りし、今回いただいた機会へのお礼の言葉とさせていただきます。



黒木 春子先生 ご講演

令和 8 年度　お茶の水女子大学論　ロールモデル講演集

発行日　令和 8 年 10 月 31 日

発　行　国立大学法人　お茶の水女子大学　グローバルリーダーシップ研究所

〒112-8610　東京都文京区大塚 2-1-1　人間文化創成科学研究科棟 506 室

E-MAIL　info-leader@cc.ocha.ac.jp

TEL　03-5978-5520

Web Site　https://www.cf.ocha.ac.jp/igl/

編集　グローバルリーダーシップ研究所　特任講師　倉脇　雅　子

アカデミック・アシスタント　奥村　真理子

アカデミック・アシスタント　保阪　いすず

アカデミック・アシスタント　山本　亜紀子